

備校のノーリツ学園中學校長を勤めた。現在は
短歌の道に励み、平成十年には毎日歌壇賞を受賞
する幸運にも恵まれ、悠悠自適の日々である。

私の避難記

栃木県 緒方 ミヨ

昭和二十(一九四五)年八月のある夕方、母が
「ミヨちゃん明日はお盆だね。お寿司を作ろうと
思うけど、ミヨちゃん手伝ってね」いつもと変わ
らず母のおっとりとした優しい声でした。私も「ハ
ーイ、手伝います」それから布団に入りましたが、
夜中三時の電話のベルで目が覚めました。父の声
で「えっ！ いますぐですか？ はい分かりまし
た」と電話は切れたのですが、それは今すぐに山
へ逃げよ！」という府庁からの電話だったので。
私には何が何だか分かりませんでした。兄二
人は軍人だったので家にはおらず、私が一番年上
なので、すぐ妹と弟を起こしました。何で山に逃
げるのかも知らずに、とにかく山へ逃げるとの命
令なのです。父も母も私たちも寝間着を着替え、
防空ずきんをかぶり、防空壕へ入るときと同じく

らしいつもりで着替えも持たず、貯金は朝の三時
で下ろすこともできず、まただれもがこれつきり
家へ帰れなくなるなんて思いもしなかったのです。
「できるだけ早く京城(ソウル)方面に汽車に乗
って逃げて」という話なら、まだ何か持って出よ
うと思うでしょうが、山へ逃げてそのあとは家へ
戻れるぐらいに思っていました。父が、玄關の戸
に外から釘を打っているのが見えました。これが
避難の始まりでした。

しかし、外に出てみるともうたくさんの人が、
ぞろぞろ静山洞の方へ流れるように動いています。
だれも何もしゃべっていませんし、ソ連の軍艦が
入港しているなんて知りませんでした。知ったの
は、ずーっとあとでした。そのころ、米軍機が一
日おきぐらいに港を爆撃していましたが、(今思
うとソ連機だったのでしょうか?) サイレンが鳴
ると、敵機がアメリカであるかソ連であるかを見
るどころではなく、壕に逃げ込んでいましたから。
そして、私たちの家は配水池の広い土地の中の一

軒家で、隣近所はちよつと遠く、町のうわさなど
少しも入ってこなかったのです。

この日も、山までどんどん逃げる人でいっぱい
で、だれも家に帰ってみようという人はいません
でした。母は普段から心臓が弱かったので、皆の
急ぐ足取りの中で一緒には歩けませんでした。夜
がだんだん明けてくると、もうだれも家へ帰るつ
もりの無いことが、ひと目で分かりました。

港の方向では、黒煙が立ち上がっているのが見
えますし、艦砲射撃の音もときどき聞こえます。
もう、これはどんどん逃げるより仕方がないのか
なあ、と私も思いました。父も母も黙って歩いて
います。だれも知人は見あたらず、心細く思いま
した。だれも、どこへ出たらいいのかわからずに
歩いているようです。私たちも、電話がなかった
らまだ家にいたかもしれませぬ。府庁でも、「京城
方面へ逃げよ」という自信もなかったのでしょう。
状況がよくつかめなくて、でもそのとき早く「内
地へ帰れるように支度をして家を出よ」とでも言

ってくれたら本当に良かったのに、と今でも思います。ソ連軍が攻めてきていることなど、軍関係の人しか知らないことでした。

二日間歩いて豆満江まで来ました。途中、山の中で朝鮮人の家の軒下に寝たこともありましたが、だれも嫌な顔ひとつ見せず、でもこれから先どうなるのかという不安は、だれの顔にもありませんでした。しかし、だれも先に立ってリードしてくれる人もなく軍人もいないし、途中で引き返す人もなく、運命の分かれ道とも知らずに歩くだけでした。輸城方面へと汽車に乗った人は京城まで出て、すぐ釜山経由で内地に帰れたとあとで聞きました。ほとんどの人が、豆満江より徒歩で南下して鏡城へと向かっていました。

母は無理な行軍でぐったりと弱ってききましたので、皆と一緒に歩けませんでした。父も、母のことが心配で、皆と同じ速いペースで歩かないように気を遣っていました。途中、私たちの家の隣に天馬小学校の校長に会いましたが、「松沢（旧姓）

車するか分からない列車に飛び乗り、列車の屋根にまでよじ登る人を見て「危ないからやめろ！」「乗せて頂戴！」人々の叫び声、当然私たち五人はこの騒ぎの中には入らず、次に列車があると思いい、下がって待っていました。そんな騒ぎの中、列車はゆっくりと動き始めました。列車にぶら下がっていた人たちは、やむなく置いてゆかれま

た。私たちがここへ来るまでに出会った知人は、天馬山測候所の所長さんだけです。所長さんの家が私たちと同じ町内でしたので、出会ったときはお互いに少しほっとしました。少しの間行動を一緒にしましたが、所長さんの娘さんの具合が悪くなって、「どうもこのまま歩いて行けそうもなく、ここで休んでいきますので先に行ってください」と言われ、お別れしました。

また私たちだけで、城津の学校で避難民がたくさん寝泊まりしている所へ泊まりました。ここでも、家族ばらばらだった人が巡り会って喜んでい

さん日本は大変なことになったよ！一日も早く内地に帰れるように、列車に乗って南下しなきゃ駄目だよ」と言ってくれば良かったのですが、先生は大らかに、何も心配は無いという風な態度でした。家族は先に逃げたのでしようか、先生は一人でした。私たちも、そんな先生を見て何となくほっとしたのですが、鏡城あたりまで来たとき、お巡りさんが「日本は戦争に負けたんだ。」「日本は戦争に負けたんだ。」と繰り返して歩いていました。私は信じられず、「お巡りさんから流言飛語を流して歩くなんて、全くひどい」と怒りながら歩いていました。しかししばらく行くと、そのことは本当だということが分かりました。その驚きは、今でも忘れません。もう家には戻れないのだと思うと本当に悲しかったし、これから先どうなるのかと不安になりました。だれもが思いもしないことになったショックを受けて、戸惑うばかりでした。

だれもこの集団をリードする人もなく、いつ発する人、離れ離れになってここで会えるかと家族を探している人など、様々な人がいました。離れ離れになったら大変だ、二度と会えなくなるかもしれないと不安に思ったものでした。皆家へは帰れない、これから先列車は出るのが出ないのか分からない、不安な一夜を明かしました。

ここで恐ろしかったことが一つ。母がトイレに入った途端に、銃を抱えたソ連兵が入って来たのです。母はもう声も出ないくらいに驚いて、とっさに入れ歯を外して、ソ連兵の方を向いて「ウーッ」と言っただけで、ソ連兵は、歯を外すなんて見たこともなかったのです。腰を抜かさんばかりに驚いて、逃げていったそうです。母の話を聞いて、私の方が膝がガクガク震えていたのを覚えています。私だったらどうなっていたのだろうか、逃げられたかどうか恐い話でした。逆らって殺されたかもしれないと、大分あとまでこの話は私を不安な気持ちにさせました。

朝鮮人はだれでも静かで、棒を振り上げる人も、石を投げる人も、嫌なこと一つ言う人もなく、暴動もありませんでした。敗戦前は、小学生は日本人と朝鮮人は別の学校でしたが、中学校女学校は皆受験で入学し、日本語は生まれたときからしゃべっているので上手で、就職先でも差別はほとんど無かったです。

日本が負けたからといって暴徒もいませんでしたので、私たちもそんな点では心配しませんでした。市場に出ている朝鮮人のおかみさんも、いつもと同じように避難民に話をしていましたし、その点は普段から日本人が朝鮮人を差別したり、馬鹿にしたりしていなかったから、こんな場合になっても被害はなかったでしょう。ただ、日本人が避難して空いた家は、先に入った朝鮮人の人の家になったそうです。社長さんが住んでいたような大きな家に入った人は、一日にして自分のものになったのですから、喜んだことでしょう。

城津で二泊ぐらいして、列車で南下できたので

せんでした。

そして、北上する列車が着いて、それに皆乗せられました。もう一步の所で南朝鮮に出られたのに、また北朝鮮に戻されたときはとても悲しい思いでした。父も母も言葉はありませんでしたけれども、それは同じ悔しさだったと思います。北上の途中、元山で降ろされました。どこへも行かず駅にずっとおりましたから、次の北上する列車に乗せられ、咸興で降ろされました。

咸興は咸鏡南道の道庁のある所で町も大きく、人口は咸南では一番の都市でした。もう、駅の前は日本人でいっぱいです。皆これからどうすればよいのか分からず鳥合の衆です。先に立って世話をしてくれる人は、だれもいないのです。薄暗くなったところ、皆は三々五々散って行きました。私たち五人も川原のそばまで歩いて、松だったかの木の生えている砂地の所に座り込んで、そのまま眠ってしまいました。何かを食べた記憶もなく、夜通しだれかの足音に怯えてたびたび目を覚まし

すが、座席はほとんど京城へ行く朝鮮人でいっぱい、避難民はほとんど立っていました。朝鮮人は今まで着なかつた朝鮮服を着て、今までの日本語を使わず朝鮮語で話しています。その変わり身の早さには、驚かされました。列車は途中停まったり走ったりで不安でしたが、三十八度線の連川に着きました。このまま走れば三十八度線を突破できるのだと喜んでおりましたら、連川に着くと、保安隊が「日本人は皆降りろ」と言って、ひと目で分かる私たち避難民を皆降ろしました。ここで降ろされなかつたら京城へ出られるのに、と悔しかったけれど、日本人は皆引きずり降ろされました。そして、列車は走り去ってゆきました。そのときのつらかったこと、今も忘れません。

皆降りた場所であらずにいましたが、若い男性たちは、もうこの先の河を泳いで渡れば南朝鮮に出られることを知っていましたので、素早く藪の中に走り去って行きました。私たち五人や年輩の者は、そんな大胆な行動が取れるはずもありま

ただだけ覚えています。父も母も私や妹のことを思っ、やはり不安で眠れなかつたと思います。

翌日、やはりたくさんの避難民が駅にあふれているので、咸興に住んでいた人が五軒ぐらいの遊郭の建物に、それぞれ住むようにしてくれました。

「音羽」「すずめの宿」「ほへと」「ゆらのすけ」もう一軒の名は忘れただけ。私たち家族は音羽に決まって、初めて遊郭という所に入りました。

一階の広間は、全部鏡張りの部屋でした。ちよつと驚きながら中二階の部屋へ、何畳だったか大分広いのですが、そこに畳一枚に三、四人の割合で詰め込まれました。夜は、鯛の目刺しのようになって、びつしりと並んで寝ました。お風呂も入れず、着替えもせず頭も洗わない生活なので、虱がわきました。川まで行って、体を拭く人もいません。そうなると、いっぺんに再帰熱とか発疹チフスがはやり出しました。隣り合った老夫婦も早々に寝込み、だれともしやべらずに、どの人とも分からぬうちに亡くなりました。横にいてもどち

らの方ですかとか、名前などを聞く余裕もなく、いつまでも他人様は他人様とばかり話もしなかったのが、今思うと不思議です。それから皆それぞれに働きの口を探しに行ったり、引揚げはすぐにできないと思って仕事に行く人もあって、昼間の部屋は空いていましたが、夜はぎゅうぎゅう詰めでした。

八月十三日に家を出て途中で戦争に負けたと聞いて帰る家はないし、遊郭の部屋では、清津の人か羅南の人か分からないまま同居することになりました。

父と弟は、二人で農家へ仕事を探しに行きました。私は、中華料理店へ行つて「ホットケーキまがい」のものを仕入れて、遊郭の前で立ち売りをしましたら、すぐに食べられるのが皆に喜ばれて、あつという間に売り切れました。妹は食事の支度をしていました。九月ごろまでは、日本人が作っていた農作物、ねぎ、ジャガイモ、にんじん、里芋などを頂き、調味料だけ市場で買ってきて、自

と言つて励ましていいか分からず、皆悲しい思いで暮らしていました。

そして十一月二日の朝、私と胸をくっつけて寝ていた父が、うめき声一つ立てずに眠るように静かに静かに息を引き取っていました。人はこんなに静かに死ぬものなのか、「うーん」とか何とかうめくと思うのですが、とことん母の亡くなつたことが、生きる力を無くしたのでしょう。私たちもとてもショックでした。私たちがそばにいても、父にとっては何の支えにもならなかったのかと思うと、とても悲しいことでした。前の日まで病んでもいかなかったのに、一夜でコトンと逝つてしまふなんて、人間って精神的にまいってくると、こんなにもあっさりと思ひ死んでしまうのですね。もつとも、引揚げの始まる話もないし、女の子二人とその下に男の子一人連れてではとても心労が大きかったのでしょうか。「さあ私が頑張らなきゃ、一番年上ですもの」と、責任を感じたのを覚えています。使役の人が納棺して部屋を出るときには、私たち

分が作った煉瓦のかまどでそれなりの食事の支度ができました。十月も半ばになると、同じ部屋の人も病気で寝付く人も出てきたりで、状況が少しずつ変わってきました。

母も家を出てからの歩き通しで疲れが出て、ある日突然に下血しました。私は父を呼びに行き、それからだれかお医者さんを知らないかと聞いて回り、薬局も探しましたが駄目でした。部屋に戻ったときには母は既に息を引き取っていました。つらいつらい十月二十日でした。でもこのころまでは威興ではお棺も準備されて、一人ひとり山へ

埋葬されました。それだけは、富坪の大墓地より良かったのですが、こんな死に方をした母が可哀想でなりませんでした。それから、父は目に見えてがっくりして、朝に晩にお経を上げていましたが、精神的に参つたのでしよう、いつもあまりしゃべらない方ですが、母の死後からは余計しゃべらなくなつて、一人しょんぼりしているようになりました。私たちが父の心が分かるだけに、何

は熱病にかかつていて、上半身を起こすこともできず、三人は涙でくしゃくしゃになった顔を、お棺が運ばれて行く方へ向けることがやつとでした。お父さん、本当にごめんなさい。

二日ぐらい寝込んでやつと起き上がり、それから三人で力を合わせ、私は立ち売りを、妹はご飯の支度を、弟は以前の農家へ手伝いに行きました。

十一月になると、威興は寒い風が吹きすさんでいました。夏服の私たちは部屋に入っても寒いし、風邪を引かぬよう気合だけで頑張っていました。こんな折り、威興では避難民があんまり集中しているの、富坪の方へ分散させようという話を持ち上がったっていました。あるとき、朝鮮人の若い男性が部屋に来て、「富坪なんて元日本軍のバラックがあるだけ、店もない広々とした丘だけの寒い所だ。あんな所へ行ったら死ぬだけだ。行かない方がいい」と言つて帰りました。同室の人はどう決めたか知りませんが、私たち三人は、集団を離

れて咸興に残っても連絡も何も取れなくなるし、不安が先に立ったのです。妹も弟も私と同じ意見でした。だれ一人頼る人もない私たちは、十二月二日、雪降る寒い日に富坪行きが無蓋車に乗ったのです。

どのくらい走ったでしょう。まさに、富坪は先に朝鮮人の若い男性が「行ったら死ぬだけだよ」と言ったように、元兵舎のほか何も無い所でした。兵舎の窓ガラスは一枚残らず割られていて、出入り口の扉さえないので。何棟あったか知りませんが、私たちは暖房もない、そんな吹きさらしの所に住むことになったのです。私たちの入ったのは何号室だったか、号など付いていなかった、というくらい覚えていないのですが、建物の前には川が一本流れていたようでした。

正月が間もなくやってきました。店も何もない所ですが、気持ちだけの正月を、と思うだけでした。保安隊が監視していて外出はさせないと知っていました。ある日私も度胸を決めて雪の降る

ん。でも、妹の誕生日だからと思ってお餅を買ってきて、「カエちゃん、今日はあなたの誕生日だね。お姉ちゃんあなたにお餅を食べさせて買って買ってきたの」と言いましたら、「姉ちゃん、ごめんね。少しも食べたくないの」と言いました。忘れもない言葉でした。食欲が全然無くなっていたのです。富坪での食事は、ご飯一杯とぬか漬けのサンマが半分、三度三度同じだったような気がします。野菜は何もないので、皆栄養失調になっていました。太っている方だった私も、いつの間にか栄養失調になっていました。だからもともと細いタイプの妹は余計につらかったのでしょう。お餅をひと口も口にできませんでした。そして、その二日後の寒い日の夜逝ってしまいました。可哀想だった妹。咸興にいたらまだ何かしら食べられたでしょうが、妹が逝ったことは、私たちが富坪を選んだからかもしれないと思いました。引揚げてからも、私が妹の寿命を縮めたのかもしれないと、毎朝お経をあげています。私の兄たちは引揚げの苦

中、保安隊の人の所へ行つて「リンゴを買いに行きたいから出して下さい」と言ったのです。「ここから逃げ出そうと思つているのだろう。駄目だ！」と言われました。私は「聞いてよ！ 私一人じゃないのよ！ 妹も弟もいるのに私だけ逃げるわけないでしょ！」そう言つて「絶対帰つてくるから出してよ」と強く申し出たら「分かった。外出しても良い」と言つてくれました。私は雪の中どのくらい走つたでしょう。リンゴをそんなにたくさんではなかったと思いますが、袋に入ったのを抱えて戻り、保安隊の人に「ほらっ、私逃げなかつたと分かつたでしょ！」と言つて妹たちの所へ帰りました。「だれも出してもらえないのに、あんた度胸がいいね」と周りの人に言われましたが、熱意で人は動かせるものだと思います。

妹は一月七日が誕生日です。我が家でたった一人の早生まれの子です。十二月二日にここへ来て、一月七日はすぐでした。少し妹の体調も悪いようでしたが、もう体調の良い人などだれ一人いませ

労を知らないし、最後まで一緒だった私が両親と妹にお経をあげたり話をしたりしています。本当に、そのころのことを思うといつも泣けてしまいます。富坪に残れば、もうここで死ぬしかないと思つたものです。

そのころ、毎朝死体が山になるほど多くなってきました。朝鮮側でも何とかしなければと思つたのでしょうか、突然トラックがきて、体調の悪いものは乗るようにと言いました。私も弟ももうフラフラの状態でしたので、トラックに乗せてもらいました。咸興の元商業高校が急造の診療所になり、並べた机をベットにして藁のマットが敷いてありましたが、シートだけは新品でした。次々に部屋に入ってきた患者は、着ていた着物を全部消毒に回され、代わりに木綿の上下を支給され、頭はだれも彼も坊主にされました。これで虱とも決別できサツパリしたね、と思つたものです。そして目の前にある鏡に映つた坊主頭の自分を見た私。「下の兄に似ているじゃないの」と、嬉しくてち

よつと「ニー」としたことを覚えています。小さいときから下の兄はハンサムなのに、私は兄には似ていないと思っていたからです。

何人ぐらい同じ部屋にいたのでしょうか。顔がとてもむくんでいる人もいました。腎臓が悪いのかなあと思いました。私は下痢をしていたので、二階から下のトイレまで走っても間に合わず、失敗したことも何度かあります。寒いのに冷たい水で体を洗って、とても苦しかったことがあります。それと栄養失調も大分重い方になっていて、頭の重さだけは減らないのに支える胴体は痩せ、足腰も弱り、階段を降りるのに頭から逆さまに落ちそうなのです。膝はガクガクだから両手で手すりにつかまり、頭を後ろに反らしながら前に転びそうになるのを必死で耐えて、階段を降りたのを覚えていません。

そんな中でも、どうしても内地には帰らなきやという気持ちは、いつも持っていました。弟は男性の部屋に入っていました。ときどき私の所へ

て、あなたの退院してくるのを待っているからね」と興福寺で待っていることを約束し、念のために「新潟のここへ引揚げるのよ」と新潟の住所も教えました。当時、威興のお寺はどこでも避難民を講堂に泊めてくれ、食事も世話会に行けば頂けました。

そして、引揚げが始まっているらしく、お寺からスタートする人がだんだん多くなり、私はその人たちを見送りながら弟の退院を待っていました。弟も間もなく興福寺へ訪ねて来て、引揚げが始まっているけれど、十五歳以下の子供は孤児として団体帰国する方法があると聞きました。大人と一緒に、襲われるとか餓死する危険は少なく、安心かもしれないと考えました。そして、弟にも意見を聞いた。「僕もその方が安全だと思うよ!」と言ってくれたので、話は決まりました。そして世話会の方へ、その手続きをしました。

お寺に泊まっていた人もぼちぼち出発するので、だんだん人が少なくなっていきました。何日だったか覚えていません。

会いに来てくれました。弟の方が、私より少し元気なように見えました。食事は高粱に牛缶（日本軍の貯蔵品を使っていた）で、高粱には米が入っていないのでボンボンで、毎日こんな食事ではありましたが、富坪よりは良かったのではないのでしょうか。三カ月もそこにいる間に、栄養失調も少しずつ良くなり始めました。世の中はだんだんと春めいてきていました。引揚げが始まっているよという声も聞かれ、黙認で通してもらえらしいよとか、何も薬一服ももらわなかったけれど、陽気の良くなるのに合わせたように、少しずつ元気を取り戻していました。

臨時の病院で命拾いをしました。北朝鮮の春は遅いのですが、四月も下旬になると陽の光もやわらかく、私たちを喜ばせてくれました。患者も少しずつですが元気を取り戻し、だれだれさんが亡くなったという話も少なくなりました。悲しいことばかりの中で、それは嬉しいことでした。そして、弟に「姉ちゃんは、先に威興のお寺に行っ

たか覚えていないのですが、「いよいよ明日の朝五時出発ですよ」と言われ、お寺に泊まっていた人は歓声をあげました。やっと帰れる日がきた、とだれもが同じ気持ちです。もっと早ければ生きて帰れた人がいたでしょうに、私の妹も四カ月頑張っていたらなあ、とつい思っていました。私はもう荷物もお金もないので、団体であってもこれから一食一食どうしていこうかと思いましたが、弟は孤児の団体にお願いしたのですが、少し心配でした。でも弟はひもじい思いをしなくて済んだようで、それは大変助かりました。弟は大分元気になったのだから大丈夫、新潟で会えると確信しました。

今晩で興福寺に泊まるのは最後だなあと、知人が一人もない淋しさがありました。明日はいよいよ出発だと嬉しさをかみしめながら、眠りに就きました。翌朝、人の気配が目覚めてみると、皆が出発の支度をしています。最初から着の身着のまままで過ごしてきた私ですから、荷物は何もあ

りません。荷物があっても体が弱っていたので、身軽になるためにきつと捨ててしまっただろうと思いました。さあ、頑張つて出発するしかない。皆に混じつて、朝まだ暗いうちに歩き始めました。

今度こそ三十八度線を越えられるでしょうね。不安もありましたが三十八度線を黙認してくれるというのだから、何かして通してもらえるようにしてあるのだから、今度は大丈夫と思つたりして歩きました。「今度また止められて戻されたのでは、私の体力ももう終わりだな」と、悲しいけれどそんなこともふと思いました。貨物列車に乗せられて、途中走ったり止められたり不安もありましたが、窓もないのでどこを走っているのかも分かりません。前の車両が切り離され、後ろの車両とも切り離され、私たちの乗った車両が一番最後になったときには、またまた不安が湧いてきて「どうぞ神様、連川まで着きますように」と両手を合わせました。そして、車両が動き始めたときは本当に嬉しかった。

きました。新しいテントがたくさん並んで建てられていて、トイレも綺麗にできていました。避難民はだれの顔も汚れていましたが、笑みが浮かんでいました。テントに入ると夕食です。夕食には煮豆が出ました。やがてこのテントで寝ることになつたのですが、まだ明かりがとまったばかりのころ、入り口に米兵が二人入つて来て「女を出せ！ 商売女でないのがいい！」と日本語をちゃんとしやべる米兵でした。私は怖くて震えていました。この声に、テントの中の皆は驚いてシーンとしてしまいました。ここへ来ても、まだこんなことがあるのか。私は入り口近くにいましたので、肩でも掴まれたらだれも助けに来てはくれないだろうと、心臓が止まる思いでした。怖かった。そのとき、テントの奥の方から二人の女性が「私たちが出ます」と言つて立ち上がったのです。三十代前半の女性でした。もう本当に、地獄で仏様に会つたということわざがありますが、そのときの私の気持ちそのものでした。米兵と女性の四人は、テ

連川にやっと着きました。列車を降り夜中に川を渡るのですが、黙認といつてもいつ駄目と言われるか分からず、皆胸がドキドキでした。前には男性、中間に女性、最後は男性と並んで、もう皆息を詰めて走つて行きました。この橋を渡りきれば三十八度線を越えたことになるので、皆必死でした。十月月の避難民生活は地獄だったからです。皆月の明かりの中を、前の人に離れないように、後ろから追われるみたいに緊張して走りました。本当にこのときが避難中の一番の緊張状態でした。「どうぞ神様、越えられますように」とだれもが夢中で走り、渡りきつたときは、「バンザーイ」と元気な声で叫びました。泣いている人も、手を取り合い抱き合っている人もいました。私は抱き合う人もなく、一人「涙ボロボロ」でした。亡くなつた両親と妹のことをまず思い、そして「私のために見守ってくれたのね」と、お礼の言葉をつぶやきました。皆泣いていました。

少し歩いて、米軍の準備してあつたテントに着

ントの外へ消えました。ホーツとした空気が流れました。あの人たちには申しわけないことでしたが、有り難うと口の中で言いました。

翌日、船で注文津から釜山へ、釜山から博多へと向かいました。博多に近づいたところに水葬があつて、本当に気の毒に思いました。伝染病が出て沖に停まつたりしていました。船の中には坊主頭の女性も大分いたのですが、上陸した博多の町では坊主頭の女性は見当たらず、早く髪が伸びないかなあと思つたものです。

船員さんが二人、汚れた私に優しく「内地の宿は、お米を持って行かないと泊まらないよ」と、私の袋にあふれるぐらいたくさんのお米を入れてくれました。体の弱つた私には重かつたのですが、船員さんの心尽くしが嬉しかったです。そして、夜にはデッキで歌を一曲教えてくれました。

両親と妹を亡くし、一度も会つたことのない父の兄である伯父さんの所に引き揚げるのですが、船員さんから教わつた歌がそのときの私の気持ち

にあまりにもピッタリだったので、六十年経った今も、その歌を歌うと優しい船員さんを思い出します。優しい人だったなあと、今でも思っています。特に二番の歌詞は、あのとときの心境にピッタリ。デッキでそっと涙したことを思い出します。

それは「霧の波止場」という歌で、二番は

「遠いあの空なぞ恋し 星も冷えたや霧の中

だれに待たれる身じやないに

何で涙が落ちるやら」です。

博多で上陸したときは、ビワの実が小さな籠に盛られて売っていました。下船して、私はやっと日本へ帰って来たのだと実感し、「だれに待たれる身じやないに 何で涙が落ちるやら」昨日教わった歌詞がピッタリで、しんみりしていました。何の連絡も取らずに今博多に上陸したばかりですから、だれも迎えに来ていないのですが、「だれだれ」と呼び合っている人を見ると、うらやましく思えました。

「何県の人は何両目です。どこその県の人はすり眠り、少し元気になりました。八時ころになって交番を尋ねて行き、伯父さんの家の住所を言うとすぐ分かり、「釜沢行きのバスで降りて四十分くらい歩くかなあ」と教えてくれました。

バスの窓から見えた田圃の緑も私には珍しく、終点で降りたときは初夏の陽射しにすっかり喉がカラカラで、道路際の農家に寄って「すみませんが水を一杯下さい」とお願いしました。そして伯父さんの家のことを探したら、道を詳しく教えてくれました。そこから歩き始めましたが、足の弱い私は四十分くらいかかったでしょうか。やっと伯父さんの家に着きました。「こんにちは」と言って入った家は、農家のちよつと薄暗い感じのする大きな家でした。伯父さんも伯母さんも出てきて「朝鮮のネーチャかね、よく帰ってきたね」と抱きしめてくれました。初めて会った伯父一家でした。そして、尋ねて来たのが私一人だけなのを知って「皆はどうしたの？」と聞かれ、八月十三日からのことをぼつぼつと涙々で話しました。

何両目です」と駅員さんが叫んでいました。今までの不安な気持ちはすっかり晴れて、たった一人で帰国したことが胸にジーンとこたえていたが、五月の陽射しは私に優しく「お帰りなさい」と言ってくれているようでした。

荷物、両親と妹の遺髪と遺爪だけです。それだけはしっかり持って、新潟行きと看板のかかっている列車に乗りました。隣の人も同じような引揚者の格好でしたが、お互い今までの苦労からすっかり抜け出した喜びで、顔も晴れ晴れしていました。

何時間走ったか分かりませんが「糸魚川」という声で、ここだと緊張して下車しました。まだ暗くて、時間は午前三時ごろでした。列車が行ってしまったら、駅には私一人でした。夜中ですからバスは走っていないし、交番はどこにあるか分からないし、私は駅に降りたという安心感もあつて、ベンチに坐って「トロトロ」と眠ってしまいました。日本の五月の夜は寒くもないし、朝までぐっ

皆も、もらい泣きをしていました。 やつとたどり着いた家。皆が優しく、今までの苦労がいつべんに吹き飛んだような心地でした。まだ栄養失調なので、久々に入ったお風呂で我が姿を見て、こんなに痩せたのは初めてで、胸にも、

ものにも筋肉はなく、げっそりしていました。こんなにまで痩せながらも帰国できたのは、元々が太っていたからで、亡くなった妹は細いタイプでしたから、避難中の苦労には耐えられなかったのよね、と口の中で「カエちゃんごめんね。姉ちゃんだけ帰って来て」と、すまない気持ちでいっぱいでした。

引揚げが遅れた弟も帰って来ました。私と一緒に引揚げはなかったらしく、少し痩せているだけで、元気でした。無事に帰れて良かったと、二人で抱き合って喜びました。

農家の五月は田圃の草取りの時期でしたので、皆が忙しそうに「私も手伝う」と言って田圃に入りましたが、ぬるぬるして気持ち悪かったことを

覚えています。稲の間に生えている草を、手をクルックルツと回しながらかき取るのですが、何しろ初めて見た稲ですから、稲穂のトゲが顔や脛にツンツン刺さって痛がゆかったのが印象的でした。でも、一日手伝って翌朝鏡を見ると、脛が腫れて目が見えないほどになっていました。稲穂が刺さったのです。伯父さんが「みよちゃん、田圃は無理だから家でご飯さしてくれればいいよ」と言われました。それから毎日ご飯の支度をする事になりましたが、田舎料理を知らないのです、朝鮮で覚えた肉料理をいろいろ作って喜ばれたのを覚えていています。

そんな生活を三カ月もしているうちに、精神的にもやっと立ち直って、体重もどんどん増えてきました。ボツボツ働くことを考えなきゃなあと思っていたとき、シベリアに抑留されていた下の兄が帰国して来ました。兄は、青白い顔をして痩せていました。兄は、一泊泊してもらって高田の病院に帰りましたが、私は涙ながらに両親と妹がど

争の体験などさせたくないと思いました。そしてたった一つの願いは、戦後六十年経っても、富坪や平壤の墓地に眠ったままのお骨を早く収拾してほしい。それだけが今の一番の望みです。

私も八十歳、二十歳のときに避難生活で生死の境をさまよった私。帰国できなかつた人々のお骨を引揚げさせてあげたい、私が努力しなければならぬと思います。もう私たちは老人です。次の時代の人では、本当の事情が分かってもらえません。いくら書いてもしゃべっても。だから、私たち北朝鮮からの引揚者が努力しなければならぬと思います。

最後に私たちが避難民となったとき、ソ連兵やアメリカ兵は女性を探して夜な夜な入って来るころがあつても、朝鮮人に襲われたとか暴力を振るわれたとかは聞きません。戦前の朝鮮が、皆平和に暮らしていたことの証明になると思います。避難中も「パビモゴツソ（「飯食べたの）」と、ご飯を山盛りにして持って来て、「早く持って行きな

んな状態で亡くなったのかを話しました。兄は「そうか、苦勞したなあ」と、短く慰めてくれました。引揚げて伯父さんの家でお世話になつていなければならぬ、こんなに早く体調も良くなかつたでしょうし、人生ももっともつと苦勞したかと思いません。今は伯父さん一家にお世話になつたご恩を忘れず、お孫さんとも文通するなどのお付き合いをしています。本当に感謝しています。

伯父さんは、私の結婚相手まで心配してくれました。私はまだ結婚には踏み切れずお断りしたのですが、その後、東京の人と結婚して主人と一緒に伯父さんの所に挨拶に伺つたとき、伯父さんは「そうか良かった。良かった。いい人のようだね」と、伯父さんの言う人と結婚しなかつたにもかかわらず、喜んで下さつたのが嬉しかったです。

子供ができてからも、糸魚川に行きました。戦争を知らない子供たちですから、私が帰国したときのことなどピンと来ないでしょうが、糸魚川の美しい自然を見せながら、子供たちには二度と戦

さい」と優しい言葉を掛けられたことなどは、いつになつても思い出します。何十年経つても。

昭和二十一年二月ごろの思い出

- ・ 乳飲み子を 抱きしめしませ
- ・ 息絶える 母の姿を国よ見よ
- ・ やせこけし 乳飲み子弱く 泣きながら
- ・ 冷たき母の 乳房まさぐる
- ・ 難民は 病魔と飢えに 身をさらし
- ・ 国に忘れられ 父母に逢いたし
- ・ 隣人の うめき声にも 驚かず
- ・ 我も寝たまま やがて死がくる
- ・ たんたん と 死ぬ日の来るのを

あらがえず 頭も胸も 深々と冷ゆ

昭和二十一年十月二十日ごろの思い出

- ・ 厳寒の 富坪の地に 眠りしを
- ・ 誰ぞ祖国へ 伝えて欲しと
- ・ 厳寒の 雪舞う富坪 眼とず
- ・ 故郷夢みつ 母に逢いたし
- ・ 悲しくも 冷たき吾が子 下ろされず

三十八度の 川今渡る

昭和六十年一月 四十年前をしのんで

・北朝鮮の 寒さと飢えに 命尽く

引揚船を 今か今かと

・避難民 六十年も 眠りたる

遺骨はいつの日 祖国へ帰る

・隣人の 呻き声途絶え 昇天し

復員風の 故郷いずこ

・船は来ず 夢に故郷 描きつつ

吹雪く兵舎よ ここは富坪

・富坪は 死への旅とは 知らぬまま

移動させられ 餓死凍死する

京城からの引揚者

神奈川県 田中留里

一 京城に住むまでのいきさつ

私は昭和五（一九三〇）年東京に生まれ、小学校は、当時はまだ原っぱの多かった世田谷下北沢の第三荏原尋常小学校にあがった。父は東大土木工学科を出た技術者で、東京市役所に勤めていた。家族は母と五歳年下の弟の四人で、秩父から来たお手伝いさんがいた。父は東京育ちだが、母は長崎市外の農村で育った人である。両親が結ばれた事情は、祖父母の生い立ちを述べたほうが分かりやすい。

父方の祖父は、明治元（一八六八）年に南部盛岡藩の下級武士の家に生まれた人で、維新では賊軍側でもあり、貧しく育ったらしい。成人後は上京して、巡查をしながら苦学して海軍経理学校に進んだ。そして主計科の海軍士官となり、上官の